

月夜遊女

泉鏡花作

一

「音やい、良い月夜ぢやねえかよ、」

と風に揺らるゝ案山子のやうに、ふら／＼と月に
描き出だされた、肴籠を振分けに、づつしり重量の
ある天秤を擔いで、前に立つて歩いたのが、鼠色
に艶のある淺霧をかけた、一むらの樹立を前に見な
がら、其處らの芋苗の葉を頷かしむべく、野良聲の
調子高。

「まるで晝間だつぺい。いつかの盆踊の夜中のや
うで、影だか人だか分んねえ、見さつせえ、おらが
道陸神に魂さ入つて活きてるだ。やあ、音。」

恚う、はあ、皎々と澄み切つた月夜となると、蟲
の這ふまでが見えさうで、それで居て、何よなあ、
何だか水の底でも渡るやうで、また、然うかと思ふ
と、夢に宙でも歩行くやうで、變に娑婆ばなれがし
て、物凄う、心持が茫とすらあよ、えゝ、音。」

と話しかけても、返事せず、其の癖ひた／＼と足の音は、踵について聞えるので、言を途切らし、天秤の上へ、南瓜の捻首で、頼冠の面をおつくふさうに振向いた。

「音やい、なぜ黙る。些と話しでもして行くべいでねえか。よう、お互に、馴れた道中でも夜ふけさふけた。これから突切つて街道を折曲る、一里塚の邊さ灘だからな、よくねえよ。主もおらもなまぐさを擔いだ上に、お月様を背負つて行くだから、些とべい氣味のいゝ事はねえだ。

何か饒舌らつせえよ。

こんな時は色ばなしも魔がさすが、法談も柄にねえ、滅入るでな。小恥かしく風流人の眞似をして、お月様のうはさをするだが、主は何で黙るだよ、や

あ、これ、

といつて又、廻燈籠が忘れてまはる足の運び、氣もなく、緩くなつて、

「音てえに。」

「むゝよ、」

と少いのが漸と答へた。同じくこれもぼてをふつ

たが、背後へ箆を三つかさねた、前へ繩からげの大魚一尾、一抱へある圖抜けな鮫鰈、其状、色好める道士に似たるを、月にさらしてあからさま、やがて地づりに荷つて居る。

天秤棒もきしむざかり、分銅かゝりに重さうなのを、血氣な向顛卷で、染入る月の肩に汗はせぬが、蒼ずむ魚の膚にも、かさねた箆の編目にも、たら／＼とあふるゝ露、霜にもならず流るゝばかり。躰の隈行く小川に聲なく、一寸黙ると、しんとして、左の右の刈田は何處までも雁の影さへさゝぬのである。

頬被の中に聲も滅入つて、

「音てえになあ、變だな野郎、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「よう、音てえば、」と、又がツくり、息をついたやうに立淀む。これにつれて、背後なる壯佼、其の顛卷の結び目を揺つて、不意に停り、

「えゝ、待ちねえ、おら些と妙な事を考へたい。」

其の足許を覗くやうに、頬被の中に目を据ゑながら

ら、

「止せやい、音、こんな處で妙な事なんか考へるもんでねえ。」

「でもな。まあ、さつさと歩行きねえな。」

「おい、歩行くがの。眞實だ、何だか知んねえけど、眞個よ、灘を越して了ふまではな、そんな何だぜ、妙な事なんか考へねえ方がいゝぜ。」

「おら又何だつて、恚う晝と夜とがらり了簡が違ふだかな、我身で我身が分らねえだよ。晝で見ねえな、新宿の濱さ土俵にして、鬼とも取組む氣だけれど、」

と、かごとがましく言ひつゞくる。

「當前よ、眞晝間何處へ鬼が出るもんか。」
と背後から元氣の可い聲。

「えゝ、夜だつて、出られて堪りごとがあるもんか。竊といはつせえよ。お前、大きな聲を出して、

まるで、あ、鬼に呼出をかけるやうなもんだ。」

とぶつ／＼足も抄取らない。

「呆れた臆病ツたらありやしねえや、」

「何だつて、お前、夜中今時分、此の街道を歩行

くものは、はあ、新宿の濱さ擔ぎ出してから、沼間、

田浦よ、金澤から杉田を山越で濱の間屋まで、まあ

よ、在所の夜網さ上つてから、恚うやつて夜ふけに

田山さ突切つて、堀割へ行つて東さ白むまで、人幾

人と、口利いたり、てくつたり、活きて働く人間

の數に限りがあるだよ。

今夜なんざ、利七が一番がけに、さうだを担いで
駈出したわ。三太と、八兵衛が馬力で二臺な、がた
くり／＼と曳出した。おらと主さ、後おさへだ、背
後の方にや當分小糠小糠の影はねえと斷念めて居る
だでな。

能見堂手前で、金澤の鹽賣が、朝月夜にきら／＼
と鹽を光らして來るのに出つくはしや、いゝ見つけ
ものだ。考へると心細いではねえか、えゝ、音。

ぐわツとでも言つて見ねえな、荷を放り出して一
散がけに前途へ駈出して、利七や三太づれに助けて
呉れい、とやりや格別。あとから來るものは人間ど
ころか、氣心の知れた犬も居ねえと決つた日にや、
えゝ、音、心持、おらあ荷が重てえ。ぼツちり、影
法師が見えねえでも、後前に夥間が歩行いて居ると
思や、どれだけ力になるか知んねえが、あとおさへ
だけにぞく／＼すらあ。

早く一里塚の難場押越して、山の下の立場の、お
鐵婆さまが店さ叩いて、飯でも炊いて貰つてよ、底
へ力を入れねえぢや、妙に膝節がく／＼すら、よ

う、碌でもねえ。異な處で汽車の車についてまはつた、島田ツ首の話なんか思ひ出した。

堪らねえな。

うまく行くと、利七でえゝが、長く飲んで居りや、追ついて一緒にならうも知んねえだが、此の間か我慢だぜ。あれ、一里塚が目の前に煙つて来た。また、馬のわらぢが、ふツ／＼ツて、いきり立つてけつかるいべい。

あれもさ、白髑體が息をして居るやうに見えてなんねえ。なあ、音、ほんのこツた、怪我にも妙な事なんか考えまいぜ。いや、どツこい、

とさしかゝる、暇から松並木へ、斜にかゝつた爪先上り。

姿の瘠せた松並木、故道は一條白く、天窓の上になくなつて、舊來た徑は草鞋の下から、小川を籠めて暗くなり、遙にさら／＼と水の音。音吉は足踏みして、「何だな。なまものを擔いだやうでもねえ、主がいふことも腰つきも、はあ、牛に曳かれて居るやうだ。

そんな氣で居たが最後よ、魚が萎えて價が下らあ、

しつかりしねえな、だらしはねえ。」

と顛卷を斜に射る月に、氣霜を吐いて白く笑ふ。

「はゝ、何うでえ、意氣地がねえぜ。」

「何ていふがな、これで其處さ一里塚へかゝつて見ねえ。押被さつた榎の下に、馬の草鞋ばかり明くツてよ、鳥籠のひしやげた形のお堂の中から、あの又地藏様の申子見たやうな、異體の分らねえ小佛が五體といふもの、異う往來を見てござる。あの前を通つて見ねえな、主だつて、ようこれ、餘りはあ、大きな口い利ける義理ではあんめえ。」

「よう、」

と鮫鰈あんかうの其その大おほいなるを、土手どてにつけず翻然ひらりと月つきに、腹はらの光ひかりをつらりと射いつゝ、手てに策ざるの繩なはをぐいと搦つかんで、軽かるく上あがつた。音吉おときちは、並木なみきの松影まつかげ、道みちの眞中まんなかの眞明まあかるきに、おさきだちは照てれた形かたち。

「さあ、おらが、さきへ行いつて遣やるべい、さつさと來きねえ。」

「待ちろい、あとおさへは氣きがねえと言いふに、慥かうなりや竝ならんで歩ある行くだ。」

と横よこざまに來きて押おし竝ならんだ、二人ふたりを合あはせて四角しかくいやうな影法師かげぼうし。

並木なみきの影かげを横よこづたひ、魚うを、木きに登のぼる風情ふぜいなる、件くだんの逸物いちもつを頭あしでさして、

「吉きちやい、おらが妙めうなことを考かんがへたと謂いふのは他ほかぢやねえだ。」

「えゝ、ぬかす。忘わすれた時じ分に意い地ぢ悪わるく又また妙めうな事こと

を考へる、止せッてえにな。」

「よせつたつてお前等も、おらが腹の中で獨りで考へるだから仕方がねえだ。チヨツ、可いや、ぢや、默然で歩行くとするだよ。」

と空を向いて、音吉は松の葉越に星を捜す上目づかひ。

「聞くよ／＼。默然ぢや滅入つてなんねえ。聞くからな、早く其の考へと云ふのを吐いつ了ひねえ。なりたけ何だぜ、變でなく聞かしてくんろよ。」

「むゝ、おらあ、變なことを考へたが。」
とうつかり遣る。

「猶いけねえ、妙が變になつては堪らねえだ。ほう、」といふ。

「はゝ、そんなえにお前ら、氣にするほどの事ではねえだよ。妙といへば妙よな、變といへば變だけれど、何でもねえ事だと思へば何でもねえ。吉やい、他ぢやねえが。」

「うむ、」とおツかなびツくり、脣へ力を入れ

る。

「そら、」

一寸ちよつと小手こてを押おして、天秤てんびんの尖さきにいぶりをくれたが、此このくらゐな事ことで、ゆツさりともしるやうな、そんな小ちひさな腹はらではない、魚道士ぎよだうし鮫鯨あんかう、字あざなは泰山たいざんで、づツしりと月下げつがに光ひかれり。

「此この鮫鯨あんかうよ。」

「鮫鯨あんかうが……」

「妙めうな事ことを考かんがへたと謂いふのはな。」

「ふむ、」

「何故なぜ恚かう腹はらが大でつかいか、といふ事ことよ。」

とはじめて聞きいて、驚おどろいて安堵あんどした、吉きちは臆病おくびやうも忘わすれたやうに、

「は、は、は、馬鹿野郎ばかやらう、くだらなく氣きを揉もませ

やがつた。お互たがひに學がく校かうさ、ずるけた方ほうの男おとこだけれど、

われ、最もう些ちつと怜りこれだと思おもつてつきあつたが、馬鹿ばか

野郎やらう。

何なんだと。……

何故鮫鯨の腹さ大いだと、當前よ。おらと、われ
と、何故男振が違ふだと、湯屋の娘が吐かしたも同
一よ。

「むゝよ、お前から色男だよ、色男は狐が好きだぜ、
そら、其處さ一里塚だ。」

「ホイ、南無阿彌陀佛々々々々々々々々々々。」

「鼻の尖にぶら下つて、然もな、おらがに食へる
と謂ふでもねえに、とはじめは唯見て居た内によ、
今の其の、腹工合を考へたゞがな、まあ、聞きねえ。

こりや、はあ、どうか眞圓ツこくすると人間一人
入られさうだと思つてよ。それも道理だ、ひもゝあ
りや、いともあり、橙色も、樺色も、蒼いんだの、
紫だの、どしこと山に籠るわけだと考へる内に、
へゝ、おらあの、吉やい、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「妙な事を考へた。そら、ぱくりとあいた顎に牡

丹餅だ。一番、途中で臍物を引ずり出して、肝を抜
いて、芋の葉で、ぶら提げて行つて、お勘婆さん店
を起してよ・・・な。」

四

「お前めえら温ぬくい飯めしい喰くひな。おらあ、こいつをぐしや／＼と煮にて熱爛あつかんだ。鮫鯨あんかうは肝きもが千兩しやうよ、黙だまつて居ゐねえ、百兩りやうぐらゐは分わけて遣やるよ。」

「厭いやだ、野郎やらう、最もういひぐさが強盗あしこみになりやがつた。

止よさつせえよ、悪わるい事ことを。

主ぬしが考かんがへるまでもねえ、鮫鯨あんかうの腹はらさ其そのせゐで大でつがいだ。賣うりものゝ肝きもを抜ぬいて、第一だいお前めえ、横濱はまの問屋とんやが承知しやうちしめえよ。」

「そんな事ことにぬかりがあるかい。まあ、黙だまつて見みて居ゐねえよ、いや、どツこいしよ。」

「あれ、荷にを下おろす。やあ、飛とんだ處ところで。そら／＼言いはねえこツちやねえ、皆呼吸みんないきを噴ふいて、もそ／＼して居ゐる。」

と慌あわたしくわきへ退のいた。榎えのきを溢こぼるゝ月影つきかげに、一里りつ塚かから湧わいて出でた墓ひきがへるの氣勢けはひして、のツそり這はひさうな捨草鞋すてわらぢ。

「此の馬の草鞋をな、……臓腑のかはりに
へし込むでごまかすだ。其處さぬかるやうなおらぢ
やねえ。」

先方だつて問屋だからな、直ぐに吊し斬りにする
のでねえ。野毛の何丁目かの魚屋で、軒から馬の脊
を降らすのが落よ。うまく南京町へでも入つて見ね
え、鮫鯨の腹から出現まし／＼た草鞋大王とか何と
か云つて、其處さ破堂でも建立して祭るべいよ。」

吉は前方へ離れながら、居合腰の樹の下影、夜な
しの駕籠屋が招くやうな、寂しい手つきで、頻にお
さへた。心がらとて自分から幽霊じみたあはれな聲
で、

「石佛がござらつしやるによ、勿體ねえ／＼。主
や云ふことから亂暴だ、よくねえよ、／＼。よさつ
せえ。第一場處柄が、よくねえだ。悪い處だ、陸

灘だぜ。」

と言ひかけてぎよツとした風、猪首をすくめて、
きよろ／＼と、天に高い榎から、戸のない、箱の如
き辻堂に、五體、晝よりは尚ほ判然と、月に露はれ
見え給ふ、佛の姿を、恐々輪なりにニして、

「へへへ、結構な、佳い處でござりますな、
へへへ。其の、へへへ、悪い眞似をするな、よくね
え場處柄だと申すんで……へ……えい、
音、止セツてえに……よ。」
ざわ／＼と梢の風。

「ひえへ、後生だ。これ、せめて、せめて、これ
此處を出て、明い處で遣つて呉れ。」

と寒さうに立竄むを、此方は血氣でおもしろ半分、
榎の根に踏みはだかり、路の眞中へ繩を弛めた、天
秤白く箆に預けて、鮫鯨を横ざまに、胸一杯に腹を
かへして、両手で重量をこたへながら、

「馬鹿を云ふもんでねえ。故ツと明い處へ出て、
盗坊する奴があるもんか。おまけに何だぜ、恚う
見た處は安達が原だぜ。此のふくらんだ處を見る、
裸に剥いた仰向けだ、――の腹を裂くだね、は
あ、何と凄かんべい。」
と嵩にかゝつて、魚の腹に、頬ぺたを押ツつけて、
「むう、白やかで暖い。」

「喰ひ破りさうな事をする。えへ、見せえ、主が

口さ耳まで裂けたやうでねえか。」

と獨りで言つて恐ろしがる。

「どりや仕事に、」

と故と思入れ、繩をさげてぬいと立つ。

「十八九といふ處だ、はゝは、」

と高笑ひ。かさ／＼と提げて出て、箒の蓋にだふ

りと敵らし、筒袖をぐいと揚げた、二の腕黒く、掴

み手に構へて見せ、

「やがて、鮮血が、」

と心持震へて居さうな吉を見遣つて、

「あゝ、何處かで絲を繰る音がする。」

「様あ、駈け出すやい、腰抜けい。」
 街道の並木がくれに、汽車ばしりの吉が影、一散
 に遁げ出した時ばかりは、初鯉を擔いだものゝやう
 であつた。

「たう／＼見えなくなりやがつた、十町一のしだ、
 何の遁げずとも事を。」

とおツかけさうな身體の構で、其の天秤の傍を未
 だ離れなかつた、音吉は、見送り果てたが、氣抜け
 がしたやうな様子。筋を入れた腕を忘れて、何とな
 く四邊が見られた。

一人に成つたことに心づくると、自分とても、二人
 の時ほど、豪傑では無かつたのである。

「何の去つちまはねえだつて可いものをよ。」
 と思はず拍子ぬけの溜息をすると、言ふまでもな
 い一里塚。前には五體の石佛、榎が上に押かぶさつ
 た、下に誰のやら分らぬやうな、重ねた笹にたてか
 けた天秤棒。

繩がたるんで蓋の上に――あゝ、詰らぬこと

を言はねばよかつた。尋常に其の膨らかな腹をのけ
ざまに、なよ／＼と尾を垂れて、屠る手を待つ状な
るが、俎を餘つた頭は、白ずんだ咽喉を突張つて、
覺悟して首垂れた風情はなく、もの言ひたげに顎を
張つて、裂けるが如く目をニつた、大いなる魚の目
の艶は、實際猫のそれよりも輝くのである。其の大
きな目がまた意地悪く目について、見まいとしても
月の隈に、動かぬ光が据つたやうに瞳を射る。
思はず熟と見入つて居ると、くる／＼と動く。
ぎよツとして、傍を向いたが、動くは鮫鯨の目の
みでない。

石佛の五ツの姿も、榎の枝も、馬の沓も、行方遙
に小山にかゝる一幅の明い夢のやうな街道も、イむ
ものゝ爪尖も、ぶる／＼と、描いた水の線の如く微
かに揺れるのは、何處からともなく寒さがこゝに渡
るので、こんな時、月の光が風に染みて、刻々な霜
を拵へる。

其の見えない霜を、音吉は口を開けて、咽喉へ吸
つて悚然とした。

「おゝ、寒い。」

一層止めようか・・・

と思つたけれども、此のまゝにして建場まで駈け
つけるか。婆が店で、吉に逢ふと、彼奴が又、温い
飯を喰つて、氣の強くなつた處、今までの遣ツ返し
に、叩き潰して黒焼にして弱蟲にして道中すがら賣
られよう。

それも口惜い。

爰はどうでも鮫鯨の腹と、おらが膽をば釣かへに
すべいきである。

と茫乎物思ふ額へ、ひやり。

「あツ、」と云ふ頸許から腰を傳つて、かさノ
と月夜を一枚、足許が、深い谷でももあるやうに
沈んで落ちた。

落葉も、友を誘つて、ばら／＼と舞つて、颯とこ
ぼれて、何時何處へやらなくなるやうなのは、搔撫
でのざらだけれども、梢にも枝にも星の數よりまば
らになるまで、二葉三葉枯残つて居るのも、たゞも
のではない。

「えゝ、何だい。」

と叱言をいふやうな、得いはぬやうな、音吉は自分
を叱るやうに、ぶつ／＼．．．．．烈しく一ツ横
に其の顛卷を引擦つた。

「まゝよ、」

と、魚の腹に望むと、餘りよく、誂へたやうに箆
の蓋に乗つて居て、待ちかまへて居るらしい、天秤
の、いゝ工合に暇の眞中に、荷によつかゝつて、所
在なささうに見えるのも、自分が爲る事ながら、誰
かが．．．．．誰かが．．．．．

それでも、がむしやらに思切つた。音吉は血氣だから、一番取ツ組む氣で、片手で仰向いた鮫鯨の、腹の下あたりを壓へつゝ……

恚うまで力を入れるには當らないのだけれども、何だか、出逢つた敵のやうな氣がしたので、一生懸命。

ぬめりと滑かな、而して蒼白い、水紅色の環を取つて柔かな顫の透へ、矢庭に差入れむとした手首が震へた。

上ずつて腕が硬く成つたのである。恐しい淵へ飛込むと思つたが、目を眠つたのである。

「痛いよ。」

トタンに耳の底へ、遠い、遙な處で言つたやうに聞えたので、ハツと思ふと目が開いた。音の右手は、手首を籠めて魚の顎へ入つて居た。

しやにむに其の手に擲まつた、腸を曳出さうと殆

ど夢中に引摺む。

「徐と、」

と再び、今度は何處でか笄がすると思つたほど、判然と聞えたのである。

飛上るほどに、慌てゝ引くと手が動かぬ。

「曳、」と曳くのと、腕がしびれたのと、掌に餘つたのを放したのと、無性に手を振つたのと、地踏ニを踏んだのと恰も同時で。

地へたゞきつけたものから、むら／＼といきれが立つた、生暖かい、咽せるやうな、湯氣の如き白氣

一團。

脈々として空ざまに、宙で揺る音吉の肩を籠めて、やがて咽喉をせめて、頬を傳ひ、面を打つて、目を包んだ。

「わい、」と反つて、矢鱈に掴んで兩手で目のあたりを搔きのめしつゝ、くる／＼と廻つた。が、苦しく一呼吸ついた時、榎を中に、兩方へ、朦々として眞白な濃い雲の、八九間、障子の如く連つて、

立ちまよ
立迷つて居るのを發見したのである。

唯狭霧の中に巻かれた如く、蜘蛛の圍に包まれた
如く、**■**然として、身動きもならず視めて居ると、
其の兩方から、少しづつ薄らいで、段々に、田の果
へ消えるのか、身のまはりへ迫るのか、次第に端ば
かしの眞中が濃くなつて、やがて此のあたりには見
も馴れぬ、一本の柳をふつくりと包んだらしい、も
のゝ姿が、すらりと傍に纏まつた。

ト被がすべつた風情、颯と霽れた、積つた雪衣の
落ちたのは、地の下に入つたらうか、それとも中空
へ飛んだらうか、折から月の傍に、梢を刷いて薄雲
が渡つたのである。

扨て其のイんだ姿のまゝに、霞を分けた柳の葉、
影艶やかにほら／＼と黒髪を文に亂して、枝ぶり映
る月の隈を、衣もののひだになよやかな、薄色衣の
腰細う、頸、耳許、頬のあたり眞白に佛に立つたる
美女。撫肩のありや、なしや。袖を兩脇に搔垂れた
が、爾時ほろ／＼と衣紋が解けて、雪の乳房の漏れ
たと見ゆる、胸のあたりで美しい、つゝましげな兩

の手首を開くと、鳩尾かけて姿を斜めに、裳を寛く
はらりと捌いた、褙をこぼれて、袂にからんで、月
にも燃ゆる緋縮緬。

頸を傾け、月に向へる、玉の顔、眉を開いて、恍
惚と目を眠つたまゝ、今ほころびた花かとはかり、
得ならぬ薫はツと散つて、ホと小さく、さも寛いだ
らしく伸をした。

其の目をばツと鈴のやう、清しき瞳を見向けたが、
丹花の朱脣愛々しく、二十を越した年ごろながら、
處女のやうにふツくりと、下ふくれなのが笑を含ん
で、熟と天窓から視めたので。

大入道なら破れかぶれ、噛りつきもしたであらう、
音吉は唯へとノと腰が崩れて、いべツたり尻餅。

顛巻天窓を伏目に見て、美女は、昔から馴染らし
い、打解けた笑顔で莞爾。

「えゝ、何だね、ぐツ、ぐツ、ぐ、鳴いてるのは、
 ー川底へ泡さ立つやうな、はあゝ、汐が引く
 だかな。」

と言ふ聲の汐も退いて、音吉は（爾時、ー）
 と同一咬々たる一帯潮入の小川の月夜、田越にそ
 よぐ蘆の中に、澤蟹のやうな踞み工合。向う鉢巻に
 結目を立てゝ、目を圓くして黙つた。

傍にぬいと立つ、二抱ほどの大きな姿は、月夜に
 擴がった影ではない、一人の親仁の、天窓からすつ
 ぽりと霜を被いだ夜具である。

手足とゝもに、からびた聲して、
 「どれ、其の畚を一寸見せるよ、序に實檢さして
 やるだ。」

「澤山は無えだよ。」

音は蘆の根に手繰つてある、ずぶ濡の投網の下か
 ら、眞黒な畚を釣ると、ほたゝと枯葉ずれ、寒さ
 に堅いやうな雫の音小夜具の袖から大きな手で、ぐ

いと取つた、親仁は鼻の尖で、ざら／＼と振つて透かして見て、

「はあ、鯨の馬鹿野郎を二疋か、海津が一ツな。」

と、も一ツ傾けて振ると、ぐツぐツぐツ、此の寂とした中に呟くものあり。

「これだ。此處にはらんばひに成つてござる、此のもろ鯨めが腹で鳴くだ。」

「もろ鯨が鳴くだとね。へい、最う魚の腹に文句のあるのは禁物だよ。」

と薄寒さうな苦笑ひ。

「其のしみつたれな了簡だ。一里塚で魔が魅したも無理はねえ。又もろ鯨の鳴くことも知らねえやうな素人の癖に、何だつて、鮫鯨の臍物を狙つたり、一人で網打になんぞ出かけるだえ。道理こそ、宵からかゝつて、蚯蚓のやうな小魚が三ツ四ツ。あとは畚一杯になつて渡り蟹の大きいのが、藻屑の生えた大鉢を、ト構へてござる。」

投網で蟹を打つて、大事に畚へ入れるやうぢや、ともづりで蜻蛉の方だ。えゝ、音。」

「あいよ。」

「お不動様の窟の下から、新宿の波打際な、鳴鶴

ケ濱の川尻、此の田越川をかけて網を打つなら、兎も角も一遍は、伊澤様御別荘の、此の七親仁に斷つて呉れ。二十代の若いものが、夜中に霜が降りればとつて、何だ、其の長股引に草鞋はよ。氣の利かねえ居候が、大掃除の溝さらひといいふもんだ、裸で遣れ。

泳いで手捕へにする心懸けでなくツちや、思ふやうに網は打てねえ。泡あ喰つた烏賊ぢやなし、長股引で泳げるかい、藝もねえ。」

「むゝよ、だからよ、何だな、おらが父爺も同一やうなことを言つて遣込るよー（爾時、）も矢張・・・竊と網を背負つて出てな、九時が過ぎて一尾もかゝらねえで、茫乎歸るか、丁ど父爺め二合半燗つて、爐ばたに大胡坐で昔自慢の潮先だもの。空畚を提げて網をびしよ／＼と遣つた日にや、天窓からこかさされて、こッそり夜具を被つても、蒲團の上で幅の利かねえツたらねえからな。唐突に手柄をして、小遣三貫な處見せて呉れうと、其處ではあ、新宿さおしかけて、網元から横濱ゆきを一荷貰つて、吉の奴とつるんで出かけた鮫鯨だがね。

おらあ、眞個のこツた。目の前にぶらさがつて居るのさ見て、はじめの内は、何故恚う腹が太かつべいな、と思つただよ。それがお前。」

と呼吸をつく。

「むゝ、待ちなよ。餘り不思議だで、一概に嘘ツばちだとも思はれねえだ。眞個だら、はい、七親仁だとして抜きかねゝえさ。――われ、腰さ抜いて、それから、何うした。」

「七親仁、聞かつせえー」

眞個のこツたが、下ツ腹が、がツくりすると、筋がへと／＼になつたやうだ。腰に他愛がなく抜けたゞがね、はあ、恥も外聞も何もねえだ。」

「當前よ。膽さ盗んで、馬の沓へし込んで置かうと思つた鮫鰯の腹の中から、そんな別嬪さ掴み出して、それで取組み合つたとか、退治たとか、われが恥や外聞のあるやうな話なら、誰が眞に受けて聞いて居いべい。……腰い抜いたで、承知するだ。」

「へ、然うまで言つてくんなさることもねえ。」と、親仁が放下した畚の中を、人指ゆびで突いて悄げる。

「だつてよ、おらだつて抜くべいと、附合つて居るだから可いでねえか、わればかり抜くとは言はねえ。」

「誰が抜いたつて、餘り可い圖では無えだからな。」

「可いわ、それから、われどうしただ。」

「あゝ、然うやつて――莞爾してな――
而してお前、眞紅なのをちら／＼と、」

「はあ、舌を出したか。」 「うゝむ、裾だよ。」

何も見得を言ふぢやねえけんど、そんな、もゝんが
あで、舌を突出すやうな甘術な奴なら、おらだつて
咽喉笛へ喰ひつくだよ。」

「いや、此の方が可恐かつべい。」

「粹で高等とやらで、はあ、神様のやうな、氣高
いだ。」

それからな、其の、髪さ捌いた、取亂した姿で、
裾さ、ちら／＼とお前、足なんぞ雪のやうに、白い
ことは、人間にかはりはねえだ。二足、三足、おら
が方へ寄附くのだから、唯最う、やたらにお辭儀を
した。」

――音吉は脛白く蓮歩を移した美女の前に、
這ひ廻つて、石佛の五體に五度、榎に一度、馬の脊
の數ばかり、夢中になつて拝んだのであつた――

「其のうちに何か云つた、其の別嬪が何か云つたがな、おらに、（何處へおいでだえ） ツて云ふやうに聞えただ。

（何故、孕婦のやうだなんて、魚の腹を抉つた。）
とでもいはれりや、一も二もなく天窓から鹽だんべいで、耳がぐわんと成つて聞えごとはなかつたゞけれど、行さを尋ねるだから、新宿の濱で取れた魚さ荷つて、これから山越に横濱まで参ります、とな、返事ぶつたやうに思つただが、聲が出たか何うだかな、自分にも分らねえだ。

魔物は見透しだ。それとも、聞き取つたゞか、何うだか知んねえ。

（私を一緒に連れておいで。）
（夜の明けぬうちに、早く。） と、あるだね。

悪くすると、然うやつて、腰が地へ附着いて居る内に、首さ、榎の梢へ抜け上つて、ばた／＼手足を二いて居る自分の身體を、高い所から瞰下ろされうも知んねえだに、連れて行けは耳よりだよ。

せめて、一里塚抜け出すだけでも、呼吸が吐ける
と踏張つて、背中を荷にして腰い切つたが。

後生になるから、一人でさつさと遁げて行け、と
言つて呉れゝば、と思つたのが、然うも行かねえ。

荷繩をかけ直すのを、傍に立つて見てござるだ。

鮫鯨は血だらけになつて、馬の脊の中さ落ちて居
たよ。

おら、又、頭の頂邊から悚然としたい。

それを、はあ、拾ひ取りに擡げる時は、何だか知
んねえ、徐と、別嬪の顔さ覗いたゞね。」

「ふん、其處で物凄く睨んだか。」

「何、矢張、たゞ人間の、極しとやかな、柔和な、
思やりのある風で、莞爾と笑つて居ツけ。」

何事も、承知の上、堪忍して置くわ、私は優しい
よ、と言つたやうな顔色で、鷹揚に見えただよ。七

親仁。」

霜しもは満みち布ぬけど、月つきの光ひかりが搔かき消けす状さまの、いひ知しれぬものありて、其その間あひだを隔へたつるや、傾かたむきながら遠とほいやうな、大空おほぞらを蘆あしから仰あふいで、

「矢張やっはり、こんな月つきだつけな。一里塚りづかを出でてから、はあ、街道かいだうへかゝつた。が、並木なみきの松まつも、あれから山やまへかけて段々だん／＼疎まばらに成なるだから、風かぜがなくツても吹通ふきとほすわ。

それに、又またおらが急いそいで歩あ行くだから、はら／＼と裾袂すそたもとの音おとがして、其その別嬪べっぴんがな、人懐ひとなつかしさうに、おらと附くっ着ついて跣足はだしだね。

榎えのきさ背後うしろから押おつかぶさつて居ゐた時ときは、葉はは無なえだが幹みきの影かげが倂おもかけに添そつたつぺい。地面ぢへたへ腰こしを抜ぬいたおらが目めには、猶なほの事こと、大おほきな脊せの高たかい上臈じやうらふに見みえたつげが、恚いかういつして見晴みはらしを竝ならんで歩あ行るけば、小こ柄らな婦をんなぢやねえけんど、それでもおらが見みて肩かたぐれえだ。

それに又また、さし當あたり鬼おににも蛇じやにも化ばけさうにも爲しねえだから、夜よの明あけるまで此このまんまなら何なんの事こと

はねえ。

些と中年増のお嬢様だ。

でもよ、おらが妹とでも道づれで行くやうに、口
利ける義理でねえから、黙りで急いだが、時々密
と竊むやうにして、横目でちらりと見る度に、唯悚
氣々々と足まで染みるのは、其の妖艶さよ。

だがね、七親仁。

それだけなら、何も變つた事はねえだけれど、ど
うも眞個ものゝ人間でねえことがあつた。」

「ちら／＼と尾が見えたか。」

と七親仁は夜具の袖に肱を極めた。兩の手で頼杖
で、交ぜ返しつゝ眞面目で聞く。

「馬鹿いふもんでねえ、尻尾をつかまへられるや
うな、そんな化粧ではねえと云ふに。」

其のな、變つたことゝ云ふのは、處々で、ふら／
＼とおらが目に入つた、大勢、其の別嬪のお供をす
るのが、月影に露はれただよ。」

「お供がな。」

「むゝ、はじめ氣がついた時は、おら、一里塚の石佛さ、あのなりで、五體、ぞろ／＼とついてござったかと思つたい。二度目に氣がついた時は、最ツと人數が多かつた、ものの十四五人も居つらうか。而してな、皆……婦人の姿だつたぜ。」

「奇代だな、すると魔物の頭かな。」

「何だか知んねえ、皆な、恚うやつて、」

と音吉は手を籠めて、ぐツと肩を狭うして、袖口を引合はせ、

「月が寒いから袖の下さ手を入れて、背中から前途の方へ、さツ／＼と、裾がからんで吹く風よ。前へうつむくやうにして歩行いてござる。背後へづらりと一人づゝ、残らず同じ寸法の婦の姿よ。袖を抱いた、袂の長い、矢張裳が靡いてな。些とも違はねえやうに、揃つて、前へ俯向いたが、唯變つてるのは、おらが連れのは髪を下げたに。」

あとへ續いたのは島田鬚よ、それも草束ねといふ奴だ。黒くねえ、衣ものゝも髪も同じ色で、姿だつて、はあ、とんと薄墨の一筆がきで、二二と遣つたやうだ。初中でも見えたと云ふではねえがね。

それが、露はれる時は、さら／＼と音がして、裾
や、袂のゆれるのが、紙子で拵へたかと思ふ氣勢よ。
其十四五人か、づらりと竝んだ時もありや、五人
ぐれえづゝ、ふは／＼と二側になつた時もあったし、
三側に揃つて、列さ短くした時もありな。ひよつと
かすると、前の別嬪に知れねえやうに、二人づゝ、
密と顔らしい上の方のぼやつと白いものを差寄せて、
何か囁いたらしい折もあつた。

そら、出た、また見える。で、それにばかり氣を
取られて、大分が道を歩行いたが。おまけに、それ
が、高い所に出たり、づつと低く成つたりなんかし
て、・・・何時でも、西か、東か、右か、左か、
屹と街道の兩方の路傍へあらはれるのを、よく／＼
氣をつけて見ると、葉が枯れて白くなつて、寒さう
に立つて居る、唐黍のおばけだつたぜ。」

七親仁おやぢこわだか聲高こゑたかに、

「馬鹿野郎ばかやらう、大方おほかたそんな事ことだと思おもつた。」

「然さういふがね、此處こゝでこそ然さういふがね。其その場合ばあひに差當さしあたつて見みせえ、唐黍たづせうこしのお化ばけだぐれえで澄すまして居ゐられるわけではねえだよ。何なんだつてお前めえ、其その、通とほり魔まさ行いくにつけて、道筋みちすぢの非情ひじやうのものに魂たましひさ入はひるだで。をかした事ことは、そればかりでねえ。

芋苗すゐきの葉はがな、また變へんだつたぜ。

處々ところ／＼の物蔭ものかげや、枯草かれくさの明あかるみへ、黒くろいんだの、白しろいんだの、ひら／＼と、あのさ、腹破はらわれで尻しつツこけの、しやくんだ長ながい面つらさ出だすと、浮出うきだしたやうな目口めくちが出来できてな。こちらを向むいては、はい、好色すきツたらしさうに、おらを黽なぶるのか、姉様あねさまを視ながめるか、目尻めじりを下げちや、にたり／＼、」

「呀や、そいつは厭いやだ。」

と參まゐつたやうに、夜具やぐの中なかで頸うなじを窺すくめる。

「な、それだもの、樂らくでねえ。月夜つきよをちら／＼と雲くもが走はしるやうに目めにつくからな、追立おつたてられるやう

に急ぐだで、途中すがら汗びツしより。

小休みをせうにも、お前、慄然とするのが附いてござるで、堪らねえぢやなからうか。

すた／＼夢中よ。

(澤山来たことねえ、)

て婀娜な聲で言つたんで、又耳がカンとして月夜に響いた。

おら、お前、吃驚して立停まつた。

「氣が附くと、はい、最う能見堂の山道さ半分が處上つて居るだ。道理こそ、先刻から時々手足が蔭になつた、おら目が眩むのだと思つたに。

了つたい、えゝ、お前、難船の島蔭と、一里塚から手繰りつけるやうに當にして居た、そら、坂の根ツこの建場さ、早や何時の間にか通り過ぎた。

旨く行きや、先ばしりの利七も甚太も未だ居よう、婆様が軒の柿の枝さ見つけるを合圖に、妖物だ！

とか何とかいつて、遠くから怒鳴らうと、それを力に喘いだに、何のこツた。

吉の臆病、今頃は太根葉の新漬で炊立ての飯を食

つて居よう。焚火さ蹈跨いで、利七徒が飲んでるか、ふか／＼と湯氣の立つ汁もあんべい。彼店さ、お縫ひ坊も起きて居べい、と一時に思ひ出すと、赫と逆上せて、はあ、へと／＼と腹が空いて、げんなりだ。

「其處で、又腰を抜いたな。」

「むむ、まあ抜いたかも知んねえが、芬と、はあ、蘇生るやうな佳い薰がした。」

魔ものゝ身體のそれでねえで、人間らしい、結構な、苳の香だ。

天の助けよ。

人間くさいとニすと、八九間上の路傍さ、茨まじりに薄の枯れた、低い土手に腰を掛けた、洋服扮装、大きな姿が、月あかりに薄く見えない。

おまけにお前、肩の上へ、キラ／＼と光つてな。」

と音吉は川べりに面を出した、水に流るゝ月の影、小波に搔寄せけむ、晃然と一條、彼處なる別荘の、水に臨んだ欄干を貫き、向う岸なる枯蘆の折伏す隈に輝く物あり。漆と銀の竿一根。

「遠さも丁どあのぐれえに、おなじやうに光つて
見えただ。」

「まさか、山路を釣竿ぢやあるまいの。」

「鐵砲だ。」

「むゝ、まあ、内の御前様の釣と来た日には、山路を釣つたつて、川を釣つたつて、些とべこ違ひごとはねえけれどよ。」

七親仁は言ひかけて、蘆に踞んだが炬燵のやう、
差寄つて聲を密め、

「其の癖、夜が夜中まで釣つてござる。矢張りお
部屋様が勧めるだよ。唯た今も、あゝやつてお寢室
に附添つて居るだかな。また、あの方が世話をする
と、希代にひら／＼と魚が掛らあ。」

ふむ、尋常ごとでねえやうだ、音やい、其時
か。――。――。――。――。

「其時だかな、而して何かね、七親仁、今時分までお部屋様も傍に居て、お世話をするかね。」

と音も寄つて、低聲にうら問ひかけるのであつた。

「一緒に。先刻もお前、お部屋様さ、例のそれ、緋縮緬の襦袢か何かで、手燭を持つて、主公様さ肩にかけまして厠にござつた。知つての通り、此の頃ぢや、最う、獨でおひろひは煩かしいで。――

成程然う云や、去年だの。・・・能見堂居廻りへ鐵砲打ちに行かして、（昔、知合の婦人ぢやが、命にかゝはる事があつて、乃公の袖に縫つたに因つて、何にも言はんでかくまひ置け。）とばかりの觸込みで、今の、お蘭の方さ連れて歸らつせえた、そちこち其の時分からの、あの御病氣よ。

何だつて、主公様は唯兩脚が矢鱈とだるくつて、段々細くなるといふ、妙な煩ひでねえか。

此頃ぢや、お前、左の脚なんざ、支いてござる杖よりか細くなつたぜ。

いくら氣が丈夫でおいでなさればとつて、まるツ

切り動くことがなんねえだ、始末が悪いよの。どつと床に凭つかゝつて所在がねえだから、まあ、寝ながら釣でもなさるだが。

あのくれえな主公さまだから、人泣かせの、無理も八ツ當りも言はつしやらぬが、夜なんぞ癩が高ぶらずに。

幸ひ、お部屋様がお氣に入つて、片時も傍さお放しなさらねえ工合だで、下々此方人等まで大助かり。

それに行渡りはよし、氣はつくの、高ぶらずよ、優しいわ。抜かりなく、粹に行届いて、然もお前、おつとりとして居なさるだ。蔭ぢや皆、はい、お蘭の方様で拜んで居るわけだでな。

始終附添つて居さつしやら。

それ、先刻もな、然うやつて片手、お部屋さまの肩にかゝつて、片手で、お廊下さ、ドン／＼と杖支いて、厠りへ來さした。手水鉢で手を洗つて、お部屋さまが、恁う媚かしく、支膝で手拭を持ったが、(良い月だ、) ツて言はつせえた時、おらを、はあ見つけさした。

おら、内證ないしやうだが、ひよぐりに出でてな。あゝ、いゝ
月つきだ、とお前めえ、身みぶるひをすると、川上かはかみで、ざあツ、
とやるだ。

はてな、下手へたさうな捌さばきだわえ。尤もつとも宵よひの口くち、今こん
夜やさ網あみを打うちますと、七親仁しちおぢいが處ところへ斷ことわりに來うせたで
ねえから、もぐりだで、旨うまからうわけはねえ。

それでも暗夜やみを打うたねえばかりが見めつけものだと
思おもつての、嫌きらひでねえだから月つきは良よし、一番ばんそこいら
まで出でて見みべいか、寒さむさは寒さむし、と二にの足あしで居ゐた處ところ
よ。

(七しち、川上かはかみを大分だいぶん荒あらすな。) と主と公こうさまがおつ
しやつたで、今夜こんやは思おもふやうにかゝらねえかな。か
たノ、威おどかして遣やるべい、と其そこ處こで、はあ、ぶら
んノ、下駄げたさ引摺ひきずつて、其そこ處こまで、内うちのジヨン
(犬いぬの名な) に送おくられながら、來きて見みると、われが、
はあ、蘆よしの中なかさ、獺かはつそが憑ついて、網あみを持もつて踊をどつてる
だ・・・・・

「えゝ！ 親仁おぢい、此この上うへ、また獺かはつそに憑つかれて堪たまり

「ことあるものか、澤山だ。」

「いや、われよりか、主公さまよ。」

「おら、如何に御鼻眞になつて繁々お別荘へ参ればとつて、お臺所口か、お庭さきよ。變にお心安いやうぢやあるけれど、お部屋様さ、見るのはちら／＼だが、親仁は然うやつて寢衣姿も拝むんだ、久い内にや、何か變つたことでも無えだかえ。」

「然うよの……」

と、かぶつて居られず、夜着から出した小首を傾け、

「別に恚うて事はねえだけんど、可恐く海が好きでの。間さへありや、窓をあけたり、柱に凭つたり、いつも沖の方さ見てござるだ。」

での、風か、雨か、海の色のかはらうといふ時は、はあ、缺かしごとねえ、何時でも立つて視ツるだが、其時は、いつまでも見入つて恍惚としてござる。沖の方さ、故郷でもあるだかと蔭で風説して、又海の色がかはらう、と云ふくれぬよ。」

海の浪は、常に此の美女の姿を前に、色をかへて

立騒ぐのであった。
たちさわ

「それに今もいふ通り、あゝやつて主公様に退屈をさせねえだが、お部屋様が世話をなさると、不思議に魚が釣れる事よ。――むゝ未だそれに、何よ、過般二尺ばかりの鱸が掛つて、水際を放れると、棹が満月のやうにしながら、光つた時よ。」

（御前さま、釣れましたね、）ツてお前、お部屋様も、はずまつせえたか、ふいと肱かけ窓の小縁の上へ飛乗らしつけえ。

おら、汐留の蘆垣の蔭から、釣れるだかな、と立つて見て居たがの、わあ、身を投げさつしやるか、と魂消たね。

お部屋さまの姿さ、倒に水に映つたでねえか。

主公様は脊は高し、大柄なり、高い敷蒲團の上に、今のそれ寝ながら乗出して釣つてござる。

肱かけだとして、随分高いわ。疊に坐つて居さつしやると、お髪ツきや、外へは見えねえやうだに、ひらりと飛んでな、欄干へ袂がかゝると、いきなり釣

絲いとさ引ひかしたつけえ。おら鱸すいぎの芻はねるのより、其その白しろい手てに氣きを取とられて、はあ、何なんと云いふ身みの輕かるさだ、踊をどりでゝも仕し込んだ身からだ體ただつぺいと思おもつたが、成程なるほど、よく／＼考かんがへりや、人間業にんげんわざでねえやうだの。

其そのほかべつに別べつに、はあ、恚かうと云いつて、湯殿ゆどのの中なかでも、髮結かみゆひにも、變かはつたところは聞きかねえだよ。

・
・
・

ぬしも觀面てきめんに知しつて居ゐて、別べつに變へんだとも思おもはねえだか。」

「思おもはねえ。つい此この間あひだも、ジヨンの奴やつにからかひながら、お臺所だいどころ口くちさ面つらを出だした、晩方ばんがただつけ、飯めし時ときで、女をんなどもさ忙いそがしさうに働はたらいて居ゐつけえな。

奥おくからあの人ひとさ出でてござつて、

（お急いそぎ遊あそばすよ、） ツて、何なんだ、戸棚とだなから、はい、自分じぶんで西洋皿せいやうざらさ出だして、ぐい／＼拭巾ふきんをかけながら、土間どまに踞しゃがんで買かひたての大根だいこんさ突ついて居ゐた。おらが方ほうを見みて、何なんにも言いはねえで、また、あの、莞爾にっこりさしつけえ。

（皆みんなな承知しょうちだよ、何なんにもいひでない、深ふかい馴染なじみだ

ね、久潤、しほらく、) と其の涼しい目の動きやうと、口つきの鹽梅と、頬の工合で、ちやんと、おらが胸に通じたがね。

女中が皿を受け取つて、七輪で、良い香のして居た、何か肉さ、一寸一寸と装つて盆にのせて出したのを、其のまゝ持つて、ツイと廊下の方へ入らしつかが、三ツ輪に艶ツぽく結び込んで、赤革のつまのかゝつた上靴なんか穿いてゐるだ。お蘭の方は、あれだ、とばかりで、鮫鯨の腹から出た、素性を知つても疑へねえ。堪らねえ頸ツつきの、後姿さ伸上つて見送つたゞが、卯の毛で突いたほどの、鰭も尾もあらはさねえ。

あとでお銚子の行くのを見て、あれを引きつけの、かんちろり、畜類め、と妖物と遊ばつしやる主公さまさ、あやかりたいやうな氣がしたゞが、女たちから、はあ、蔭ながら御容體を聞くと、串戯ではねえ。 . . .

今も、親仁が言つけがね。最う此頃ぢや、右の足も瘡せ細つて、押魂消たおらぢやねえけれど、お腰

さ抜けたも同然だといふからな、氣になつて堪らねえぞ。

知つての通り、おらが父な、惣領な、おらまで御恩になる主公さまだ。

唯御病氣と聞いた處で、蔭で信心ぐれぬしなればなんねえだに、何うも其のお煩ひさ、お部屋さまの所爲に違ひごとはないと思ふだ。

其の魔物さ、おらが不了簡から、此の世の中へ引き出して、途中で主公さまに押つけたわけだからな。申譯がねえ、はあ、何うすいべい、と些とばかり氣を揉んでることではねえだよ。

其の時分にや、言ひおくれた。

おかくまひなさればとツて、直ぐに、あくる日から騒ぎでねえか。

伊澤さまのお別荘へ、天人見たいなお嬢様が、と先方から話しかられて、何、そりや鮫鯨の腹からこれ／＼だ、と面と向つて、何と眞晝問話されべ

い。

「

「たまには、極く遠慮のねえ友だちに、眞面目に雑と話すとな、聞く奴はあたまから不思議とも變とも思はねえ。」

龍宮から、……然うよ、魚の腹へでも宿つて來ざらに、人間にやねえ別嬪さまだ、と一も二もなく合點して了ふでねえかね。何にもならねえ。

其中、主公様が御寵愛と、薄々濱へ聞えるでな、御恩になる主公様を、おらが口から魔道に落いて、妖物の婿にしては濟むめえ。夢だ／＼と思ふうち、何だか、うぬが方が夢になつて、先方さまは正眞贋ひなしのやうな氣になつたゞがね、怪しいお煩ひだで、又黙つて居られなくなつただよ、胸がむら／＼として居るだ。

先刻から綱さ打つても、魚よりか、はあ、あの、晃々する、主公さまの釣竿にはかり氣を取られてよ、冴え切つた此の月さ見るにつけて、然うだ、去年の丁度此の月だ思ふ處へ、よう七親仁。

お前ら、此處へ來て呉れたは、神様お引合せだと

おも 思ふだな。嘘か、真か、お前年紀の功で、よく分別
をして呉んねえよ。おらにも何だか分らねえ、馬鹿
め、そんな事があるもんか、と一口に言はれりや、
それまでだ。

おや 親が貧乏で、年貢の未進、水牢ぢやねえだから、
どこ 何處へ駈込み訴さすでもねえだが、黙つて居ちや
なんねえから、笑はれるのを承知で話すだ。腰を抜
いたまで、白状したで、おらの言ふことに嘘はねえ
だが、何うだね。」
と言つて寒からう、夜着の袖に身を寄せて、音吉
は震へたのである。

おやぢ 親仁もためいきで聞いて居た。

「むゝ、何うも話の様子ぢや、魅されたにしても、
確なものだ。」

と言ひかけて苦笑ひ、

「何も、はあ、魅されたに確は要らねえこんだ。

だがね、おらも何だか變になつた。

お前が主公様を思ふこと承知なり、氣心も知つと
るで、萬八とは思はねえが、成程、こりや人が聞い

ても承知はしねえ。それにしても、はい、おらが主公様ほどのお方がよ。希代だな。」

と頻に傾き、しばらくして七親仁が、

「で、何か、お前、爾時主公さまには、何にも其の事を言はねえだな。」

言の下に、

「言つたとも！」

言つたがな、これが吉なら眞實にもしたらうが、主公様ほどのお方だから、てんづけ、おうけとりはなさらねえのよ。」

「然うよ、然うよ、そんなものよ。」

「おらは、それ、能見堂てまへの、坂の途中で、山獵にござつた主公様のお姿を見たゞがな。最も其の時は誰だかも分んねえ、薄の中の影武者だね。」

「うむ、然うよ。」

「姿は狩のそれだしよ、鐵砲の銃口さ、あの通り、竿の漆が光るやうに月に映らあ、おらあ、ぐツと強くなつた。それに親仁、恚う坂道へ竝んだ處は、先刻も言ふ通り、華奢な、かよわい婦人だからな、同じ取組むにも松の木と、薄だよ。」

おまけに、鐵砲もありや、人もあると思つたから、
赫となつて、突然お前、

（こん獸ア、）と武者ぶりついた。
と、ぐツと力手を伸ばしたので、親仁は退つて、
足を踏んだ。

「ふむ／＼、」

「ひやりと手に觸つたのは衣でな、するりと、
つたと思ふと、わけもなく身を轉はした。」

おら突のめつて、むツくり起ると、

（あゝれ、）

ツてお前、何處を押しや、あんな可愛らしい、し
をらしい、情らしい、あはれつぽい聲が出るかと思
ふ。
「

「ふむ、／＼、ふむ。」

「繊弱い、細い、悲鳴を揚げて、綺麗な鳥がそれ
 たやうに、月夜をはら／＼と駈け出して、汝からお
 前、鐵砲の下へ飛び込んで、其の狩武者の袖へかく
 れたゞなあ。」

「はての、」

「おら、はあ、呆氣に取られて、しばらく宙にぶ
 ら下つて居たツけよ。」

其奴は、と言はうと思つて、恚う身構へして、坂
 を、十足ばかり上るとな。」

薄の中で影が分れて、すツくと立つた狩装束。

――

ふか／＼と煙立つて、爽かに露を拂ふ、紫の煙濃
 く、太き葉巻をくゆらしながら、悠然として來り迎
 へた、廣額疎鬚、鼻隆く眉迫つて、豹の眼の老紳士。
 是なむ號を槐庵と稱して、湘南の地に都を避けた、
 今は在野の老政治家……何其の侯であつた。

(何ぢや、音か。)

(ひやあ、主公。)

おらを見て、いきなりだ。

(いたづらをするな、) とばかりで、呵々と、

はあ、叱りつけるやうに笑はつしやつたらうでねえか。

とんと、おらが手籠めにして、なぐさみかけでもしたやうによ。

何でも魔物めい、死んねえけりやなんねえ義理があつて、一里塚の榎の枝へ扱帯をかけて縊つたけれども、石佛様が五體揃つて月あかりで見でござるで、後髪さ引かれるやうで、死に切れねえし、死なねばならず、しく／＼泣いて居た處へ、おらが通りかゝつて、無理やりに助けて呉れて、婦人一人ぢや夜道は危い、兎も角も一緒に來う、悪いやうにはしねえからつて、連れだゝせて、道々それを恩にして、いろ／＼いやな事を言つたけれど、死なうと思ふほどのものが、何うしてそんな、野道で浮いたらしい事が出來よう。

頭ぱツかり振るもんだで、たうとう彼處へ來て、恐しい事を。あの男はいたづらに目が眩んで、お姿は分らん様子、お見かけ申して縊るだで、助けて／＼

と遣つたものよ。……畜生現在のまに、無理のねえ處を言つて誑らかさあ。

（どうぞや、婦人は然ういふぞ、）　ツて主公さまは、それにして了はつせる。

飛でもない事をおつしやらあ、實はこれ／＼でと、魚の腹のことを低聲でいひ／＼、露顯に及んで、きやつと言つておらが咽喉へでもかぶりつきはしめえかと、氣がさすからな、少し離れた婦人の方を、一寸々見たがな。

別嬪がよ。然も／＼身體を投げ出して主公さまに縋つた、と云ふ風でな、いま其のお膝へ倒れ込んだまゝ、茨に長く裾を曳いて、襦袢の襟も脱けたなり、横ずわりに、尾花の穂の燃えるやうに片膝ついてよ。震へながら、頻りと恚う、思はせぶりな優しい手つきで、重いやうに髪を撫でつけて居るではねえか。

主公さまは其の姿と、おらが顔とを見較いべさし
けえ。

（何、魚の肝が彼女になつた、馬鹿いへ、野郎、）

ツて眞個にふき出さしつけえ。

銜へてござらしつた、葉巻がの、煙つたまゝで、
ばさりと落ちたで。

おら、慌てて拾つて吸つた。」

と煙草を挟んだ指のかまへ、音吉の鼻の尖に指二本、丁寧な目を据ゑて吹かして見せる。

七親仁は、きよとんとして、つまゝれ顔。

「何だ、それは、」

「一本五兩と聞いて居ら。勿體ねえ、迎も突合詮議をされた處で、おらが公事は勝ちさうにもねえだから、せめて、葉巻でとヤケに出てな。」

「しみツたれな眞似をすらえ。」

「うむ、主公さまも然う言はしつけえ。」

（音、そんな事をする了簡ぢや、いたづらも仕かねんぞ、さつさと働け。煙草をやるから歸つたら又来いよ。）

とばかりで、ばかり、と靴の音さして、婦人の傍へ行かつしたが。

おら、其その此こつ方が側はをな、荷物にもつを擔かついで、こそ／＼
と尾花をばなずれに通とほり抜ぬけた。何なんだか、お邪魔じやまでもする
やうだよ。

其そのかはり、峠たつげに上のぼつて、思おもふ状さま葉は卷まきをふかし
た。――其その馬ば鹿かさ加減かげんを聞きかつせえ。――

七親仁分別顔して、被つた夜着をかなぐり脱いだ。最も話のなかばから、大方丈の抜衣紋に、背中へ懸けて居たのである。

「音、おら、此處で聞いたで疑はねえだが、其山路でやられては、主公さまでねえと云つて、誰がお前に手を上げい、へい。たゞ事でねえな、音。」

「むゝ、何うしいべいと思ふだね。」

「待ちろ／＼、月も同じ一週忌だ。はあ、何事も年忌々々よ、此のお月様の工合では、」

と禿げた額を照されて、霜置く眉を顰めながら、
「時刻も彼是、其の時だつべい。恚う、又しん／＼と更けるだに、川邊のお亭に主公さまと二人切だ。ちよつくら忍んで行つて見いべい。」

何かゞあるべいさ。行つて見いべい。」

「これからか。」

「おゝよ。」

「直ぐにな、」

と、音吉は身を起したが、ざわ／＼と、蘆吹く風に大きに逡巡く。

「汝が發頭人で居て、何の状だ、さあ、來うよ。」
「だつて、お前、だつてお前、向う岸から覗けば
だが、月あかりでは届くめえ。夜夜中何處からお聞
が見えるもんか。」
「其處はよ、天道様おあつらへだ、寢ながら月の
見える仕かけよ、お縁の雨戸は硝子張だ。」

石燈籠があるばかり。隠るゝ隈はなかつたが、一
面の芝に跽音立たず、ぬき足の影法師と、さし足の
四人づれ、影を踏倒して一人づゝ、黒く雨戸に掛つ
た、中なる障子も硝子越。

呼吸を詰めて、差覗くと、湯たんぼの薰や籠る、
蘭奢の香や立迷ふ、燈はたゞ春の水に、月やゝ長き
趣にて、朧々しいと艶なるに、厚衾敷設つけた、金
欄の雲高き中に、胸の下まで搔卷かけて、枕を《一
のり出した肱かけ窓、主公は片肱かけなが細目に開
けたる窓の外へ、白銀の棹を手にしつゝ、轉寢をし
給ふらむ、寂として、身動きせず。

唯見る、此方に雪なす頸脚、結ひたての三ツ輪艶
かに、徐と据ゑたかと差俯向いた。腰の扱帯の薄紫。

霞に靡いて身を空に、主公の褥にすらりと軽う、半ば乗つかゝるやうにした、美女の後姿。

二人は顔を見合はせて、ひツたりと差覗く。――美女は忪くて主公の足を、柔かに撫り参らせつゝあつたのである。

やがて、するりと身を引いて、すらりと障子の蔭に立つた。が、黒髪の色を籠めて、天井が高く、暗く、凄いやうに見えたのは、思ふ二人の迷であらう。

時にはら／＼と衣の音、襦の運びにちらめくは、雪を包んだ未開紅。

ちら／＼と褥を拂つて、主公の寢て踏延ばした、爪尖のあたりへ移つた時、吃と艶麗な横顔で、枕の方を流眄に掛けた。……やうであつた。

搔卷の裾を柔かに、ふツくりと廻つて向う側、今度は主公の右の足を。

片膝ついて褥にかけると、ひら／＼と炎か燃えた。

二人の面は熱かつたが、否とよ、こぼれた緋縮緬、やがて白脛に冷く消えた。

琴に差向ふ風情して、揃へてさした白魚の指、左
右へ開いてしとやかに、且つものやさしく、徐と又
搔擦りはじめた時、月影彼處に透くよとする、顔清
く衝と上げて、流るゝやうな瞳を此方へ、眉を開い
て莞爾して、直ぐにもとの、ふツくりとある伏目に
なつた。が、其途端に、二人は天窓から慄然とした、
音の如きは逃げようとして、やつと止まつた。

(いゝ兒だ、おとなしく見ておいで、皆承知だ

よ、) と言ふやうに見えたのである。

さて、今更退くにも退かれず、凍つて了へ、と立
窘む。

しばらくして、又ひら／＼と炎が絡んだ。

吃驚すると、美女の袖口から、主公の搔卷の袖に
映つて、嘗めて行くやうに燃え上る。

あゝ、膝からも紅が、裾からも流るゝ炎。

此方の傍から、裾をまはつて、向うに運んだ歩行
のあと、いかに、いつも身を放たず、名にも人目に
も立つまでの、緋縮緬の襦袢とはいへ、影も疊の蒼
きに映つて、友禪ぞめの花の川、俤にこそ立つたり

けれ。其處も彼處も紛ふべうなき、一面の炎となつて、煙むら／＼と立蔽ふに、燈火は暗くなつて、中にも一條矢の如きが、柱を巻いて、緋の環をかけて閃いた。

「火事だアイ。」
「火事だ、火事だ。」

喚くも叩くも殆ど同時に、音と七の四ツの拳が雨戸を揺つて、未だ煙はかゝらぬ廊下へ、月影とゞもに躍り込んだ。

小力のある音吉は、夢のやうな火を熱く蹈んで、二三ヶ所火傷をしながら、無言で主公に飛びついた。

「天の網だツ。」

天井を抜く破鐘聲、七親仁は半狂亂で、仔細あつて雫も切らず、先刻から引提げて立忍んで、計らずも我生れ得て、網を打つに妙を得つ、若き折に、寒月に裸で波に捌いたも、今此の時の用ぞとばかり。

すツくと立つた美女の、炎の中に佛白き、黒髪かけて天井一杯、颯と、火の網を投げたる手練。

網の目炎に染つたのを、一目見て、飛んで出た。

庭前は早や火の粉の雨。潜り抜け／＼、

「主公さま！ 主公さま！」

「此處だよう、此處だよう、」

と遠くで呼ぶ、音吉の聲を知るべに、塀を出て表通り、向う側に田圃の前なる、小さな煙草屋の垣根の處に、音吉は、主公に附添つて、火の手を睨んで居たのである。

「おゝ、主公さま。」

と七親仁は、唯くる／＼と廻つたが、

「音、頼んだぞ、」

と言ひすてて、斜ッかけに又塀の内へ駈け込んだ。

邸の内は寂として、却つて門の外に五六人、わや／＼立ち騒ぐ人の影。

霜を装ふ大空冴えて、炎の色は薄紅梅。火花は星の中に燦然として、且つ消え、且つ飛び、煙は渦を巻いて立騰れど、忽ち河水にかすれ行きて、濱の松の夜影も包まず、櫻山の頂刈る、利鎌の月を見てあ

れば、騒ぎぞ、人々、我かくてあらむほどは、たと
ひ二十日の影なりとて、かばかりの煙に、月夜にや
は限あらせむ、と冷やかに差覗ける風情なり。

遠近の躰、畦道、川上の橋の上かけて、提灯の數
ちら／＼と、灯連れて顯れた。が、恚る田舎のこと
なれば、狐の嫁入と云ふものめく。

親仁が主公の杖を捧げて、引返して來た時は、川
に臨んだ一水亭、母家へ渡殿の半ばで焼留つて、お
邸は二階の人も無事との報知。

「お亭は、骨ばかりの火になつて、柱も鴨居も、
まるで朱で描いたものゝやうだ。音、行つて見べい、
御免を蒙つて、」

と、さそつたには仔細がある。網で伏せた美女の
亡體で。

主公は何となく、黙つて頷きたまひつゝ、杖を片
手に、片手を柴垣の上にかけて、音吉の手を離し給
へば、勇んで、二人して又駈出した。

堀際に差置いた、消防の梯子、長三間ばかりなの

に、言ひ合ほせたやうに手をかけて、

「遣つて見いべいか、」

「遣つて見いべい。」

顔を見合はせて頷き合ひ、ずる／＼と引摺つて、

諸共に取直した、片端を兩人の手。

斜に縦に持直して、

「ありや、」

「やア、」

と、きほひの懸聲。

燃残つて立つた、柱、壁ともいはず、鴨居と云は

ず、川へ向けてめつた突き。

五ツ六ツ振ると、もう最う疲れて、

「やあ、ほう、」

「どツこいしよ、」

と言ふ下に、火の柱、火の鴨居、火の床の、肱か
け窓によつた片隅、上下にかさなりあひ、ぐら／＼
と揺れて水入と水。

火の粉ニと立ち榮えて、煽にひら／＼と燃えなが
ら、河の面に砕けたが、炎の煽が風を起して、引汐

時を流れ落ちず、逆に川上へゆら／＼と二三間、曉方の汐のみち／＼て溢るゝばかりの波に揺れて、ゆらりと山へ上るやう。

炎に紛ふ緋縮緬、唯見れば燃ゆる鴨居を裾に、扱帯の色もありのまゝ、従容として、川浪に立あらはれた其の美女。一本の火の柱、火先に腕をからませながら、白やかに搔取つて、斜めに櫂を操りつゝ、二人を見て又あからさまに莞爾した。

それもこれも定まる運の、主公を屠らむとして過ちし本意なさよ。さらば、と言ふが……瞳に宿つた。

あれ／＼とばかりに、二人は炎の船を追うて川ぞひに、やがて主公の、在す方。

「主公様。」

「あれ／＼。」

「呀！ 助けんか。」

と仰するほどに、山の腹に訝して、中空を渡る音。風があらぬか、岩打つ浪が、タトタトタトタトと土を刻むで聞えたが、眞近になつて八々と留むと、

一個の黑影、月の下に露はれて、身動きをしたと思ふや、颯と風の如く駈けて来て、あふつて、主公を雑倒さうとして危く留つた。

「危い！」

「誰だ、」

と、七と音、我を忘れて夢中で怒鳴つた。

「槐庵々々！ 槐庵！」

高らかに侯爵の號を呼んで、衝と目の前突立つた

は、白銀の兜に、同一白銀の大鎧、ざつくと着た、

身の丈抜群の神將一員。

征矢一筋、半弓を脇挟んで、朱の如き眼なニき、

藍碧の面に怒を含んで、

「御身、人爵の榮を得て、世のために功あるが、

天職を忘れたり。見よ、あの婦人。」

と鎧の袖、水晶を削る音して、川の面を顧つた時

――美女は取りかへて、火の柱を屹と小楯に取

つた。

「あの、夜叉、足下の手に滅ぶるやう、天に於て

おきて
掟したるに、足下の怠慢、再び海に放ち終んぬ。世
の禍又是よりして幾何ぞ。あれ、見よ、今の機を逸
すな、勤めずや、槐庵。
とて弓に矢を添へて與ふるを、此の老政治家は我
を忘れて、戦きながら受け取つて、川面を見向きも
あへず、あはれ力なく足なえて、礮と地の上に倒れ
たのである。

くわじ
火事
のなごりの薄煙、水あかりに颯と靡いて、炎
の權も、火の船も、東雲の空に紛るゝ兜鎧の色に分
れて、沖へさして引潮時。

はなうた
鼻唄まじりのポンプの音。暁の浪が打ちはじめた。

【完】